

妙光院を開山された真如法親王は、真言宗を開かれた弘法大師空海の高弟の一人と言われています。幼名を高岳親王たかおかと言いました。このお名前からお分かりかと思いますが、天皇家にお生まれだった方です。父は平城天皇へいぜい、母は伊勢継子いせのつぎこで、第三皇子として延暦十八年（七九九）に生誕されました。また、文学史上有名な在原業平ありわらのなりひらは甥に当たります。

大同四年（八〇九）、平城天皇は病により嵯峨天皇さがへ譲位し、それに伴い高岳親王は皇太子となりました。しかし、その翌年、藤原薬子ふじわらのくすこが平城上皇の再即位を画策した内乱がおこり、高岳親王は皇太子の地位を廃されてしまいます。弱冠十二歳でした。以後十二年間、朝廷の記録に親王についての記述はありません。

将来に無限の希望をいだいていた少年にとって、心の苦悩、葛藤は想像を絶するものであったでしょう。そのこともあってか、次第に仏教に心惹かれていったようです。十八歳の時、三論宗さんろんしゅうの道詮律師どうせんりつしと出会った親王は、その後も禅林寺の宗叡しゅうえい、伝法院の修円しゆえんといった高僧に師事し、元来の聡明さと非常な熱意とで、仏教の教えのかなり深いところまで学びを進めていきました。そして、親王の人生の方向を決定づけたのは弘法大師との出会いで、弘仁十三年（八二二）に大師の弟子となり、弘仁十五年（八二四）には正式に受戒して「真如」の法名を授けられました。その後は自ら建立した超昇寺ちようしやうじ（現在は廃寺）より高野山に登り、厳しい修行に励んで、「頭陀親王ずだしんのう」と賞賛され、遂には密教の奥儀である金胎兩部こんたいりやうぶの灌頂かんじやうを受け、高僧となりました。大師ご入定後の四十九日法要では六人の法要僧の一人に選ばれ、さらには東大寺大仏修理の検校（総責任者）に任ぜられるなど、公式にも名僧として認められることとなりました。し

かし、そのようなことは親王本人にとっては本意ではなかったようです。

貞観四年（八六二）、親王は突然唐への渡海を願ひ出ます。周到な準備をして出航し、無事に唐土へと到着した親王ですが、「漢宗の諸徳多く論学に乏しく、意ある歴問とするも、我が師に及ぶ者なし云々」「親王法悦をなされず」と記録にあるように、唐では仏法の真髄を得られませんでした。そこで次は仏教の故郷であるインドをめざし、遙かな旅路を出発したのですが、以後の消息はとだえてしまいます。「真如法親王、旅の途中羅越国らこくに於て死去せらる」という報告が中樞という日本人僧侶によりもたらされたのは、それから十六年後のことでした。志半ばで、異国の地で波乱の生涯を終えられたのです。歴史の大きな波に翻弄ほんろうされながらも、それに逆らうことなく、しかし流されることもなく、一心に仏道を歩まれた親王は、僧侶としてだけでなく、一人の人間としても希有けうなお方であったと言えます。

昭和五十九年（一九八四）、弘法大師御遠忌に当たり、全真言宗青年連盟が中心となつて作製した『空海』という映画があるのですが、その最後のほうの場面に、親王が登場します。そこで、「私は楽しい旅をした」という台詞を親王が口にするのです。ご自身が実際にこのような言葉を話されたのかは分かりません。おそらく作家の創作でしょうが、なぜだかとても印象に残る言葉でした。この「楽しい旅」とは、豪華旅行のことではないでしょう。「楽しい旅」が本当に意味するものは何だろうか、折に触れて考えるのですが、正解はいまだ得られません。ご縁あつて妙光院へおいでになった皆様に、開山の師であり、平安時代屈指の名僧である「真如法親王」のお名前をぜひ心に留めて頂きたいと思い、この拙稿を書かせて頂きました。

妙光院は、本覚山真如寺と号し、宗派は真言宗豊山派です。かつては真言宗御室派として京都の仁和寺の門末に属し、末寺が二十八寺ある当地の真言宗道場でした。

歴史は古く、貞観元年（八五九）に真如法親王により開山されました。開基は、親王の弟子である慈濟僧正です。永享十一年（一四三九）、宥源上人が再興して、天明元年（一七八一）第十九世滄洲上人の時に真言談林となりました。

開山の謂れとして、次のような話が伝わっています。

ある時、行基大師の彫った地藏菩薩像を手に入れた親王は、像を安置するのにふさわしい景勝地を探すため、諸国遊歴の旅に出ます。長い旅路を経て武蔵国総社六所明神（大國魂神社）に至った親王が辺りを徘徊していたところ、辰巳の方角（東南）に紫雲がたなびき、その雲から天花が次々に落ちて来しました。親王はそれを見て大いに歓喜し、その場所に寺院を建立して地藏菩薩像を安置することに決めたということです。

妙光院は代々高德の名僧が多く輩出したため、時の有力者からも篤い信仰を得ました。戦国時代には八王子城主の北条氏照も帰依し、たびたび立ち寄っては護摩供を修したといひます。祈祷の巻数に添えた寺からの贈物に対する氏照の礼状二通（府中市指定文化財）は、寺宝として今日まで伝わっています。

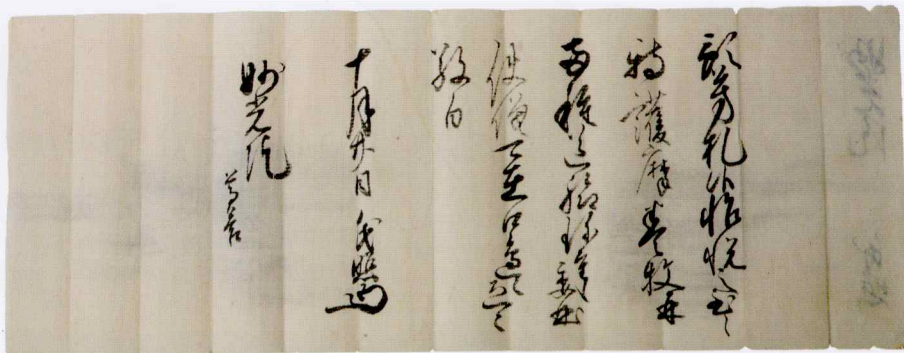
また、江戸時代には、徳川家康や徳川家光も鷹狩で近くの府中御殿へ来るたびに立ち寄り、家康からは御朱印十五石を寄進されました。家康や家光から受けた種々の下賜物のうち数点は、氏照の書状と同様、寺宝として残っています。そのうちでも金銅蓮華形磬（東京都指定文化財）は珍しい品で、天竺から渡来

したものとされています。

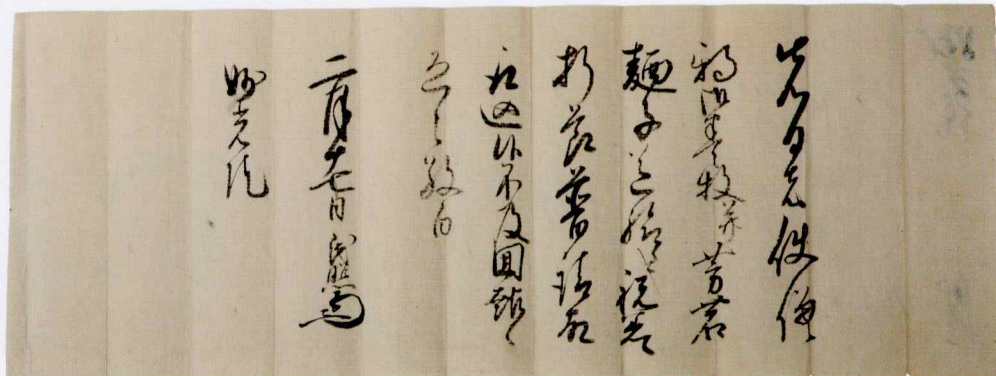
徳川家と妙光院のこのような関係は、住僧の才庵の存在によるところが大きかったと言われています。才庵は、才能が豊かで書にも優れていたため家康から寵遇され、祐筆（文書の作成・執筆を行う専門職）となりました。豊臣秀吉政権下の奥州の陣では、家康軍に随行して感状なども書いたそうです。

寛永十一年（一六三四）、府中一帯の火災のために堂塔は残らず全焼しましたが、江戸幕府による府中御殿再建に際し、妙光院も余った資材と白銀を寄進され、寛永十七年（一六四〇）に復興しました。その後、明治十五年（一八八二）にも火災にあり、本堂や庫裡などが焼失しています。江戸時代に建立されたもので現存しているのは、通用門、仁王門、本堂右手にある宝篋印塔などです。現在の本堂は昭和四十二年（一九六七）に再建されたものです。





北条氏照書状
八王子滝山城主、北条氏照から送られた書状二通。住職から護摩札や茶、そばを贈られたことに対する礼状。



金銅蓮華形磬（こんどうれんげけい）
徳川家から下賜された磬（寺院内で読経の間に打つ楽器）。蓮華をかたどった磬は数多くありますが、そのほとんどは一輪の蓮華のみからなり、このように多数の花を集合させて形づくったものは非常に稀です。製作は南北朝期と推定されています。